

子どもをとりまく生活環境と意識の実態研究（1）

——長期欠席の子どもとの比較を通して——

堤 マサエ
堤 昭博

目 次

- 1 はじめに
 - 1-1 研究の目的と視点・枠組
 - 1-2 問題意識の背景と関連概念
 - 1-3 調査の対象と方法
 - 1-3-1 調査の対象の選定
 - 1-3-2 調査の方法と期間
 - 1-3-3 山梨県の小中学生の総数と調査対象の基本属性
- 2 子どもをとりまく生活環境
 - 2-1 小中高校生別分析
 - 2-1-1 個人の所有物と家庭の学習環境
 - 2-1-2 家族環境
 - 2-1-3 地域環境と社会参加
 - 2-1-4 学校の出欠動向と生活実感
 - 2-2 男女別の分析
 - 2-2-1 個人の所有物と家庭の学習環境
 - 2-2-2 家族環境、地域環境、社会参加
 - 2-2-3 学校の出欠動向と生活実感 (以上、本号所載)
 - 2-3 家族形態別分析 (以下、次号掲載予定)
 - 2-3-1 個人の所有物と学習環境
 - 2-3-2 家族環境
 - 2-3-3 学校の出欠動向と生活実感
 - 2-4 意識と実態のクロス分析
 - 2-4-1 父母像と人間関係
 - 2-4-2 生活の満足度と生活実感
 - 2-4-3 欠席傾向と家族関係・生活実感
- 3 長期欠席の子どもの家族・社会環境
 - 3-1 小中学生別分析
 - 3-1-1 家族環境
 - 3-1-2 地域環境
 - 3-1-3 成績・情緒・行動について
 - 3-1-4 長期欠席の発生状況とその対処・指導方法について
 - 3-2 男女別分析
 - 3-3 家族形態別分析
 - 3-4 欠席理由と家族・社会的環境の改善・対処をめぐって
- 4 要約と今後の課題

族が、どのような諸属性をもち、どのような状況に依存しているかを明らかにすることは、子どもの情緒、行動などを分析する上で重要である。文部省の報告において、「登校拒否に陥った直接のきっかけ」を「学校生活での影響」「家庭生活での影響」「本人の問題」の三つに分けて分析している。これは、子どもをとりまく生活環境、生活構造の影響を考慮しての分析視点と思われる。子どもの行動は、主なきっかけがあっても、総合的、複合的、累積的に影響していることは周知のことである。したがって、各々の局面の観察や視点を含めた総合的な実態把握が必要である。これらは、学校側の観察、家族の実態、医療や相談機関などの社会的機関の側の観察など、さまざまな観察を総合化させることが必要な研究領域であると言える。

そこで、本研究では、総合的な視点とそれぞれの実態把握の必要性を知りつつ、現実的な制限の中で、次のような分析の基本的枠組を設定した(図1)。調査票の構成はおよそこの基本的枠組にしたがっている。生活環境といってもさまざまな局面があるため、ここでは子どもにとって影響があると考えられる家族、地域、学校の限られた領域に求めた。その内容についても、子どもを対象とする一般的な生活環境調査は最大限わかりやすく、答えやすいように配慮をした。長期欠席の子どもに関する調査は担任あるいは養護教諭の観察を通しての実態であり、多少のバイアスがあると考えられる。これは逆に、問題のある子どもの実態を客観的に把握した結果であると言うこともできる。

1-2 問題意識の背景と関連概念

すでに、文部省は昭和63年度「児童・生徒の問題行動実態調査」において、現在の学校が抱えるさまざまな問題、悩みを明らかにしている。そして、登校拒否の増加は4万人以上と深刻であることを指摘している。そこでは、子どもたちが学校へ行けなくなった直接のきっかけは、小学校では親子関係などをめぐる家庭生活、中学校では学業不振や友人関係、教師との人間関係など、なんらかの意味で学校生活に関連しているものが大きな比率を占めていることが明らかにされている。子ども達の意識と実態を広く捉えると、長期欠席の子どもや医療相談機関に行った子ども以外にも多

く子ども達が「学校がイヤ」になることがあるという指摘もある(「不登校」問題に関する社会学的研究、大阪市立大学文学部、森田洋司)。このように多くの子ども達に学校嫌いの傾向があり、増加しつつある小中学生の登校拒否、不登校の問題、11万人を超えるといわれる高校生の中途退学者の問題は、重要な社会問題として注目されるようになってきた。そして、今ようやく、よりよい改善策を求め、さまざまな視点から総合的、学際的、体系的に検討され始めようとしている。

ところで、長期欠席の子どもをめぐる捉え方、見解はさまざまである。もちろん、各々の立場や学問的分野によって異なることは当然考えられることである。さまざまな見解の中で、その捉え方に関して話題を提供した一つに、稲村博の見解がある。彼によると、登校拒否は病気の一種であるという観点から早期発見、早期治療が必要であり、それをしないと無気力になりやすいという考えを示した。これに対して、登校拒否は治療の対象ではなく、教育環境のゆがみであるとする考えがある(登校拒否を考える市民連絡会と登校拒否を考える医療従事者の会)。長期欠席の子どもの中には、精神的な病気が原因の子どももいれば、学業不振からなる子どももあり、医者やカウンセラー、心理相談などさまざまな立場の人が対応している。したがって、病気であるとはばかり言えない面もあり、教育環境が悪いからと決めつけることもできないと思われる。とすれば、子どもをとりまく生活環境全体の変化、そのゆがみが子どもに問題を生じさせるとみることもできる。しかし、生活環境全体の変化とはどのような変化か、がまた問われなければならない。個々の事例から長期欠席の原因を見い出すことができ、改善されたとして、それが全てのケースに適応できるというわけにはいかないこともまた事実である。いずれにしても、長期欠席をめぐる問題、捉え方、発生要因の存在などについて、さまざまなものがあり、混沌としているのが現状ではなかろうか。

しかし、少なくとも社会の変動という点と集団の機能、その分担のあり方(変動論と機能論)という点から考えれば、個人が生活する集団が変化し、その集団の機能の仕方、あり方が変わり、適応できない子ども、大人が増えてきたと見ることもできよう。その集団は、家庭生活そのものであ

ることもある。また学校であることもある。そして地域社会であることもある。集団のどの領域が変われば機能分担が変わるかを特定することは困難であるが、家族と学校の連携、機能分担とあり方が変われば子どもの生活は影響を受ける。子どもにとって、家族と学校の生活にギャップが大きければ、子どもの生活はバランスをくずしやすくなってしまふ。

さらに言えば、このような「変動」と「機能」という点からみれば、子どもの問題は家族や学校、社会が抱える問題の投影である。学校や家族は、それらがもつ集団的特質によってそれぞれのあり方、現われ方をする。しかし、単純な図式で、社会、学校、家族と子どもの関連を考えれば、社会が変われば学校が変わり、家族が影響を受けて、子どもの存在、心や行動が変化する。その逆の変動はほとんどないとみられる。社会変動と家族の変動には常にずれが生じるが、そのずれが大きすぎれば、家族自体も不適応を生じてしまうと考えられる。その歪みが、機能の低下であることもある。また、小家族化や核家族化という形態の変化であったり、単身赴任、父親不在や役割喪失であることもある。そして、そのみでなく、子どもは学校という社会の下位体系の中で位置づけられ社会化される。子どもをとりまく中心的な環境である学校や地域のあり方が子どもに影響を与えることは言うまでもない。社会の変動と学校が必ずしも連動的な機能関連をしているとは言えない。社会が変わっても学校は旧態依然とした存在の仕方をしているとすれば、そこには自ずと歪みが出てくる。学校は一定の決められた存在理念があって、それにしたがって組織化され、社会に一定の機能を果たしていることは確かであるが、子どもにとっては、家庭と学校の価値や判断基準が異なることは、心や行動に歪みを起こしやすくなる。ここでは、このような問題意識を背景としながら、時間的な観念を分析の中で取り入れつつ（小中高校生別）、個人の家族、学校、地域という空間的拡がりを視野に入れて分析をする（家族形態別）。「変動」や「機能」に関心をもちつつ、直接には子どもの生活実態と意識を把握することとする。

次に、対象と方法を述べる前に、長期欠席について簡単に整理しておく。ここでの長期欠席は年間連続でも断続でも30日以上休んだ者のことであ

る。その理由は、身体的疾患、外傷、精神的な問題、自律神経失調症、怠学、登校拒否、問題行動、家庭の問題、その他を含んでいる。学校へ行きたくてもいかれない場合、あるいは学校へ行く意志がない場合がある。たとえば、登校拒否とされている子どもは、親や教師がそれと判断したものの中には意図的に行かないとみられることもあるが、子ども側からすると行かれない者も入っていることがあり、登校拒否は、多様な現象をひとまとめにしたあいまいな用語である。その意味では、不登校の概念はより広いと思われる。不登校については（「不登校」問題に関する社会的研究）において、次のように規定している。「不登校とは、欠席ならびに遅刻、早退などの行為に対して、生徒ないしこれを取り巻く人々が、彼らの解釈枠組みに基づいて、妥当でないと構成する動機に根拠をもつ現象である」このように解釈することによって広い対象を捉えようとしている。本稿では、このような遅刻、早退行為は含まれないが、遅刻、早退行為は、怠学傾向に入ると考えられる。ここでは、詳しい概念規定はできないが、登校拒否や怠学など一般的に使用されている用語にはあいまいな使われ方をしているものがあり、統一的に捉えることが必要である。

1-3 調査の対象と方法

1-3-1 調査対象の選定

本研究の資料は二種類の調査からなっている。すなわち、一方は一般的な子どもの生活環境調査と、他方は長期欠席をしている子どもについての家族、社会環境の調査である。前者の調査対象は子ども自身であり、後者は長期欠席の子どもの担任または養護教諭を対象としている。

一般的な子どもの生活環境については、対象学年を小学5年生、中学2年生、高校2年生に限定した。この選定は、「情緒、行動面で問題のある児童・生徒の実態調査」（「せいしんえいせい」第22号 昭和62年）において明らかになった点と関連している。すなわち、子どものさまざまな問題の発生は学年、発達段階によって特徴がある。問題発生率という点から見ると、小学校では、3年、5年にピークが示され、6年ではやや減少している。そして、中学に入ると2年、3年と急激に増加をし、高校1年生で再び減少、高校2年生で増加を示す傾向が明らかになった。したがって、本

調査では、小学生は調査対象として可能な高学年であるということと、中学生期の準備段階として重要であると考えられることから5年生に限定した。中学生は、問題発生率の高い2年生、3年生のうち、進学や進路の問題をひかえている3年生はさまざまな悩みが多いと予想されるが、そのために調査対象とすることはさしひかえ、急激な身体的、精神的成長期であり、中学生期の特徴を代表する2年生に限定した。高校生は最も問題が多いことが示されている2年生に限定した。高校生では問題発生率は中学生ほど高くなく小学生程度であり、高校3年生では少し減少傾向を示していた。高校生が低率なのは、義務教育ではないため退学が可能であること、あるいは中学時代に登校拒否の傾向や問題がある場合、高校への進学を断念することも予想されることと関連があるかも知れない。しかし、問題発生の比率が低いとはいえ、学校の中で問題とされないだけで、地域社会や職場で問題となることは当然予想されることである。問題とされる状況は、各々の発達段階に特徴的なものと、幼少時から蓄積され、累積されてきているものが顕在化したものと、そのメカニズム

は複雑多様であり、必ずしも、その要因や契機を特定できにくいものである。

以上のような理由で、小学5年生、中学2年生、高校2年生に限定し、一般的な子どもの生活について、子どもを対象に調査を実施した。対象校の選定については、山梨県下8ヶ所の教育事務所ごとに、地域の特性をある程度示していると考えられる小学校、中学校を選んだ。対象とした学校は後記してある。なお高等学校は、地域特性と普通科と職業科の相違を加味して選定した。表1-1-1、表1-1-2は県立高等学校の生徒総数（昭和62年度、昭和63年度）を示したものである。その中の昭和63年度、2年生9591人中1891人（19.7%）を対象にした。表1-2-1は、調査対象高校生の男女別総数である。高等学校については、各々の学校ごとに特徴があるため、学校別分析が必要である。その分析は後に譲るとして、工業が男子、商業が女子の割合が高く、全体としては、山梨県立高等学校の総数の割合に近い男女別のサンプルを得たと考えられる。

他の一つは長期欠席の子どもに関する家族、社会環境の実態調査である。これは、昭和62年度と

表1-1-1 昭和62年度 県立高校（全日制）の生徒総数

	1 年 生		2 年 生		3 年 生		合 計	
男 子	5198	53.2%	5070	53.6%	4837	52.8%	15106	53.2%
女 子	4564	46.8%	4392	46.4%	4321	47.2%	13278	46.8%
合 計	9762	100.0%	9462	100.0%	9158	100.0%	28384	100.0%

山梨県学校教育科資料より作成

表1-1-2 昭和63年度 県立高校（全日制）の生徒総数

	1 年 生		2 年 生		3 年 生		合 計	
男 子	5134	52.1%	5078	52.9%	4931	53.3%	15144	52.8%
女 子	4723	47.9%	4513	47.1%	4316	46.7%	13553	47.2%
合 計	9857	100.0%	9591	100.0%	9247	100.0%	28697	100.0%

山梨県学校教育科資料より作成

表1-2-1 調 査 対 象 高 校 生 の 総 数

	男 子		女 子		合 計	
日 川 高 等 学 校	276	59.4%	189	40.6%	465	100.0%
富士河口湖高等学校	179	50.6%	175	49.4%	354	100.0%
甲府昭和高等学校	189	48.8%	198	51.2%	387	100.0%
甲府工業高等学校	287	96.0%	12	4.0%	299	100.0%
甲府商業高等学校	100	25.9%	286	74.1%	386	100.0%
合 計	1031	54.5%	860	45.5%	1891	100.0%

注1：その他に2名が性別不明である。総合計は1893名である。

昭和63年度の2回にわたる調査である。昭和62年度に実施した一般的な子どもの環境調査の調査対象校に対して、その学年に限り実施したもの（小中学校あわせて40ケース）と昭和63年度に山梨県全体に対して実施したもの（小学生87ケース、中学生228ケース）である。

昭和62年度の調査は一般的な子どもの生活環境調査の対象の中から長期欠席の子どもの実態をさぐるのに有効なサンプルであった。しかし、サンプルが40ケースと少ないため、再び翌年に調査対象の範囲を広げ、対象校のみでなく山梨県全体として実施したものである。サンプル数の算出にあたっては、すでに山梨県精神衛生協会研究部門で調査した（せいしんえいせい第22号）問題のある子どもの発生率（小学校0.6%、中学校1.1%、高校0.5%、全体で0.7%）から考慮して、一定数得られると見込んだ。ところが、この精神衛生協会が実施したものは、情緒、行動に問題のあるものと長期欠席の両者を含んだものであるため比率が高いといえる。本調査では、対象を長期欠席をしたものに限り、「連続あるいは断続30日以上」に限定したため予想に反してサンプルが少なかった。サンプル抽出の精度を保ち、なおかつ一定数のサンプルを得ることが必要であると考えられるため、長期欠席の期間は変えず、翌年再調査を実施した。文部省が実施しているのは50日以上であるから、本調査はそれよりも短い欠席期間であり、対象の広がりがある。

1-3-2 調査の方法と期間

一般的な子どもと長期欠席の子どもの二種類の調査と昭和62年度と昭和63年度の二回にわたる次の4つの資料の調査方法と期間、手続きは以下のようである。

① 小中学生の生活環境調査

小学5年生、中学2年生を対象に昭和63年1月20日から2月5日まで、質問紙法による集団面接法を用いた。担任教師に調査を実施する際の手引書を渡し、その通りに記入することを申し出た。

高校生は、この期間は、すでに期末休暇や年度末の行事に入っていたため、選定校全部を調査することが不可能であった。そのため、翌年の同時期に実施することで見送った。回収方法は直接大学へ郵送するように依頼した。調査対象校全てに回答を得た。

② 長期欠席の子どもの家族・社会環境調査

子どもを取りまく生活環境調査の対象校で、しかも、対象学年（小学5年生、中学2年生）について、質問紙法で実施した。記入者は担任や養護教諭であり、期間は、①と同様、昭和63年1月20日から2月5日、回収方法も①と同様の方法で行った。

③ 高校生の生活環境調査

2年生を対象に平成1年1月10日から1月31日の期間、質問紙による集団面接法で実施した。小中学校と同様、教師に手引書を渡し、指導を願った。回答者の中には、全くでたらめを記入している者があり、無効となったケース（2ケース）もあった。子どもを対象とした生活環境調査は、小学生が一番真面目に回答していたが、中学生、高校生になると不真面目な者があった。回収方法は、①と同様、直接大学への郵送を願った。調査対象校の中で、1校、拒否があったため普通校の地域的バランスは十分とは言えない。しかし、高校の場合はかなり各校による独自性があるため、それほど全体のバランスがとれないサンプルにはならなかった。

④ 山梨県全体の小中学校を対象とする30日以上長期欠席の子どもの実態調査

ある程度のサンプルを得ることが必要なため再び昭和62年と同じような調査項目について実施した。期間は平成1年1月12日から1月31日。欠席の期間は昭和63年4月から平成1年1月末までとし、30日以上連続、断続の欠席の子どもの対象に、養護教諭あるいは担任が記入することで行った。記入者のための手引書を渡し、客観的、また精度の高いものになるように願った。回収は、①と同様の方法を用いた。長期欠席の対象者がいない場合にもその趣旨の報告を願った。80%以上の回答があった。

1-3-3 山梨県の小中学生の総数と調査対象の基本属性

表1-3-1、表1-3-2は昭和62年度と昭和63年度の小学生の総数と50日以上欠席した登校拒否の子どもの数を示したものである（山梨県学校教育課資料より作成）。登校拒否についてみると、小学生では、昭和62年度よりも昭和63年度は全体に比率が上昇している。男子は女子よりも高い。これは全国的な傾向とも一致している。学年

表 1-3-1 昭和62年度、昭和63年度の山梨県の小学生の総数と登校拒否の数

昭和62年度 小学生の総数と登校拒否													
	1 年 生		2 年 生		3 年 生		4 年 生		5 年 生		6 年 生		合 計
男 子	5199	50.3%	5571	51.1%	5777	51.3%	5491	49.1%	6102	50.9%	6326	51.0%	34466
女 子	5134	49.7%	5321	48.9%	5485	48.7%	5697	50.9%	5885	49.1%	6073	49.0%	33595
合 計	10333	100.0%	10892	100.0%	11262	100.0%	11188	100.0%	11987	100.0%	12399	100.0%	68061
登校拒否	4		6		9		9		17		19		64
登校拒否率	0.04%		0.06%		0.08%		0.08%		0.14%		0.15%		0.09%

注 1 50日以上欠席を登校拒否としている

山梨県学校教育課資料より作成

表 1-3-2 昭和63年度 小学生の総数と登校拒否

	1 年 生		2 年 生		3 年 生		4 年 生		5 年 生		6 年 生		合 計
男 子	5067	50.2%	5229	50.4%	5588	51.1%	5793	51.3%	5970	51.0%	6118	51.0%	33765
女 子	5021	49.8%	5155	49.6%	5346	48.9%	5493	48.7%	5726	49.0%	5879	49.0%	32620
合 計	10088	100.0%	10384	100.0%	10934	100.0%	11286	100.0%	11696	100.0%	11997	100.0%	66385
登校拒否	8		3		12		17		11		19		70
登校拒否率	0.08%		0.03%		0.11%		0.15%		0.09%		0.16%		0.11%

注 1 50日以上欠席を登校拒否としている

山梨県学校教育課資料より作成

表 1-4-1 昭和62年度 中学生の総数と登校拒否

	1 年 生		2 年 生		3 年 生		合 計	登校拒否	男 女 比	登校拒否率
男 子	6382	51.2%	6795	51.8%	6642	51.0%	19819	120	54.8%	0.6%
女 子	6075	48.8%	6329	48.2%	6373	49.0%	18777	99	45.2%	0.5%
合 計	12457	100.0%	13124	100.0%	13015	100.0%	38596	219	100.0%	0.6%
登校拒否	44		90		85		219			
登校拒否率	0.35%		0.69%		0.65%		0.57%			

注 1 50日以上欠席を登校拒否としている

山梨県学校教育課資料より作成

表 1-4-2 昭和63年度 中学生の総数と登校拒否

	1 年 生		2 年 生		3 年 生		合 計	登校拒否	男 女 比	登校拒否率
男 子	6307	51.8%	6376	51.1%	6788	51.7%	19471	155	55.0%	0.8%
女 子	5860	48.2%	6098	48.9%	6329	48.3%	18287	127	45.0%	0.7%
合 計	12167	100.0%	12474	100.0%	13117	100.0%	37758	282	100.0%	0.7%
登校拒否	53		98		131		282			
登校拒否率	0.44%		0.79%		1.00%		0.75%			

注 1 50日以上欠席を登校拒否としている

山梨県学校教育課資料より作成

別では、昭和62年度では、学年が上がるにしたがって高くなっているが、昭和63年度では、必ずしもそうではない。2年生の比率が低く、また、5年生は4、6年生に比べると低い傾向を示している。

中学生の総数と登校拒否は表 1-4-1、表 1-4-2 である（山梨県学校教育課資料より作成）。中学生については、小学生の約 7 倍の高い比率を示している。全国統計を見ても昭和61年度で

は、中学生は小学生の6.7倍、昭和62年度では6.2倍の高さであるから、山梨県の傾向も全国的傾向と一致していると見られる。学年別には、昭和62年度には、中学2年生が高い比率を示している。男女別の比率は、若干、男子の比率が高いが小学生では男女の差はないようである。

そこで、本調査対象者の男女別（表 1-5-1、表 1-5-2）と家族形態別（表 1-6-1、表

表1-5-1 生活環境調査の対象者(男女・学校別)

	小学生		中学生		高校生		合計	
男子	821	52.1%	666	50.1%	1031	54.5%	2518	52.5%
女子	754	47.9%	664	49.9%	860	45.4%	2278	47.5%
不明	0	0.0%	0	0.0%	2	0.1%	2	0.0%
合計	1575	100.0%	1330	100.0%	1893	100.0%	4798	100.0%

小学校中学校は昭和62年度調査, 高校は昭和63年度調査

表1-5-2 対象児童生徒の学校と性別(昭和62年度, 昭和63年度の長欠調査)

	昭和63年度				昭和62年度			
	小学生		中学生		小中学生		合計	
男子	48	55.2%	129	56.5%	29	72.5%	206	58.0%
女子	36	41.4%	96	42.1%	11	27.5%	143	40.3%
不明	3	3.4%	3	1.3%	0	0.0%	6	1.7%
合計	87	100.0%	228	100.0%	40	100.0%	355	100.0%

表1-6-1 小中高校生と家族形態(生活環境調査)

	小学生		中学生		高校生		合計	
直系家族	563	35.7%	514	38.6%	658	34.8%	1735	36.2%
核家族	887	56.3%	718	54.0%	1092	57.7%	2697	56.2%
父子家族	24	1.5%	10	0.8%	8	0.4%	42	0.9%
母子家族	88	5.6%	78	5.9%	106	5.6%	272	5.7%
他の家族	4	0.3%	4	0.3%	16	0.8%	24	0.5%
不明	9	0.6%	6	0.5%	13	0.7%	28	0.6%
合計	1575	100.0%	1330	100.0%	1893	100.0%	4798	100.0%

小学校中学校は昭和62年度調査, 高校は昭和63年度調査

表1-6-2 小中学生別家族形態(長期欠席調査)

	昭和63年度				昭和62年度			
	小学生		中学生		小中学生		合計	
直系家族	17	19.5%	50	21.9%	7	17.5%	74	20.8%
核家族	47	54.0%	135	59.2%	27	67.5%	209	58.9%
父子家族	7	8.0%	7	3.1%	0	0.0%	14	3.9%
母子家族	14	16.1%	30	13.2%	6	15.0%	50	14.1%
他の家族	2	2.3%	5	2.2%	0	0.0%	7	2.0%
不明	0	0.0%	1	0.4%	0	0.0%	1	0.3%
合計	87	100.0%	228	100.0%	40	100.0%	355	100.0%

1-6-2)を参考に対象の比率と属性をみてみたい。まず、本調査の生活環境調査対象者は、昭和62年度の小学5年生であり、山梨県全体では11987人中1575人(13.1%)である。男女別では、男子6102人中821人(13.5%)、女子5885人中754人(12.8%)であり、男子が少し女子より多い割合

になる。中学2年生は、昭和62年度の総数は、13124人であり、本調査対象者は1330人(10.1%)となる。男女別では、男子6795人中666人(9.8%)、女子6329人中664人(10.5%)であり、女子が男子より多い割合になる。そこで、生活環境調査の対象者は、山梨県全体の子どもの小学5年生は13.1%、

中学2年生は10.1%、高校2年生は19.7%の比率であることが確認される。したがって、小学生と中学生はおよそ10人に1人、高校生は5人に1人の割合で対象者としたことになる。分析の際、小中学生のサンプルを合同にする場合もあるが、高校生は独立して行ったのも、全体のサンプルの抽出数が相違するためである。

次に長期欠席者の山梨県全体と本調査対象者の数を表1-3-1、表1-3-2、表1-4-1、表1-4-2と表1-5-2から検討してみる。ただし、山梨県全体の長期欠席の日数は50日以上となっているが、本調査は、30日以上としたため対象者数は多くなるものと予想される。まず、昭和62年度は小学5年生と中学2年生に限定したから、その年度は小学5年生と中学2年生のみをみしてみる。山梨県全体では、小学5年生17人(0.14%)、中学2年生は90人(0.69%)となっている。本調査で回答があった者は、小学生20人、中学生20人であった。小学生の20人は、妥当な数と予想されるが、中学生は90人を超える数を予想していたが20人しか得られず、サンプルとしては適当とは言えないことになる。少なくとも100人ぐらいの回答を見込んでいたが、果たせなかった。そこで、翌年には、全学年にわたって、学校全体の中で30日以上欠席したものとして、対象者を拡大した。昭和63年度は山梨県全体での小学生の登校拒否の子どもの数は、合計70人(表1-3-2)となっている。本調査において回答のあった数は、70人を超えていることから、およそ妥当な数と考えられる。

男女別にみると、山梨県全体では男子は62.9%、女子は37.1%であり、本調査では男子は56.6%、女子は42.1%となる。したがって、県全体と比較すると本調査は男子よりも女子の割合が多いサンプルということになる。

次に昭和63年度は山梨県全体での中学生の登校

拒否の子どもの数をみる(表1-4-2)と、合計282人となっている。本調査において回答のあった数は合計228人(表1-5-2)である。この228人は、282人より下まわるから、まだ回答をしなかったケースがあると見られる。282人中228人としても、80.9%である。したがって、ほぼ全体をカバーできているとしても、小学校ほどの妥当な数字ではない。昭和62年度の長期欠席調査も、昭和63年度のそれも、中学生の回答者が少ない結果になっている。男女別の比率を見ると、山梨県の中学校全体では、男子55.0%、女子45.0%である。本調査の中学生は、男子55.0%、女子42.1%となる。したがって、県全体として比較すると本調査の中学生は女子が少し少ない程度で、ほとんど比率の上では同様の傾向を示しているサンプルといえる。

対象者の生活の基本的な背景となる家族形態について、一般的な子どものそれ(表1-6-1)と長期欠席の子どものそれ(表1-6-2)を比較してみよう。まず、表1-6-3の山梨県の世帯類型と表1-6-1を比較すると、核家族の比率は、県全体よりも1.3%少ないが、県全体の国勢調査では、核家族の中に母子世帯5.7%、父子世帯0.9%が含まれた数字であるからそれらを含めた核家族率は、62.8%となり、県全体よりも多くなる。また、直系家族の比率は、県全体の比率では25.7%であるが、本調査では36.2%と10.5%も多い。本調査では、子どものいる世帯を対象としているため、単独世帯がない。その分、直系家族の比率が高くなるとみてよい。また、母子世帯も父子世帯も、本調査と国勢調査の比率は山梨県全体と比較すると、ほとんど同様の傾向を示している。甲府市は母子世帯が多く、父子世帯が他に比較して少ないが、本調査のサンプルは県全体、市部のサンプルに近い。次に、表1-6-1と表1-6-2を比較すると、長期欠席の子どもの家族は、一

表1-6-3 山梨県の世帯類型

	核家族世帯	その他家族	非親族世帯	単独世帯	合 計	母子世帯	父子世帯	1世帯当たり 親 族 人 数
山 梨 県	57.5%	25.7%	0.1%	16.7%	100.0%	5.55%	0.99%	3.35人
甲 府 市	61.3%	15.2%	0.2%	23.3%	100.0%	6.16%	0.94%	2.91人
市 部	59.0%	21.1%	0.1%	19.8%	100.0%	5.86%	0.96%	3.19人
郡 部	55.8%	30.6%	0.1%	13.5%	100.0%	5.21%	1.02%	3.53人

(1985年 国勢調査より作成)

全国 (3.1人)

表2-1-1 自分の部屋を持っているか

	小 学 生		中 学 生		高 校 生	
持 っ て い る	1,321	84.5%	1,216	91.6%	1,821	96.4%
持っていない	243	15.5%	111	8.4%	68	3.6%
合 計	1,564	100.0%	1,327	100.0%	1,889	100.0%
自分の机を持っているか						
	小 学 生		中 学 生		高 校 生	
専 用 机 あ る	1,515	96.6%	1,286	96.9%	1,710	90.7%
専 用 机 な い	53	3.4%	41	3.1%	176	9.3%
合 計	1,568	100.0%	1,327	100.0%	1,886	100.0%

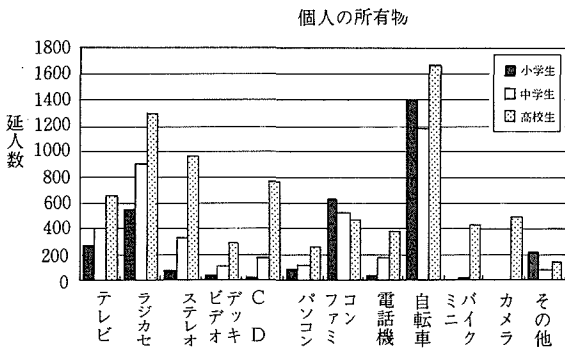


図2-1-1

般の子どもの家族に比べると、直系家族世帯は、15.4%も少ない。とりわけ、父子世帯は、一般的な子どもの家族の4倍、母子世帯は、2.5倍の高さである。

学年別にみると、(表1-6-1)、全体の傾向と比較すると、小学生では父子世帯が多い。中学生は、直系家族が2.4%ほど多く、高校生では、直系家族が少なくなっている。これは、ライフ・ステージの進行上、当然予想される比率であるが、父子世帯が少ないことは、本調査の特徴であろうか、ライフ・ステージの進行という点から考えると逆行である。長期欠席の子どもの家族形態を小、中学生別に見ると(表1-6-2)、昭和63年度の小学生は、長期欠席全体の傾向と比較すると、母子世帯も父子世帯も著しく多い。中学生は長期欠席全体の傾向からみても、それほど多いとはみられないが、小学生は、一般的な子どもの家族形態と比較すれば、母子家族は、2.8倍、父子家族は8.9倍の多さである。小学生は、核家族も、直系家族も少なく、母子、父子家族が多いということにな

る。このように、長期欠席の子どもの家族形態は、片親家族が多く、また、祖父母も同居していない形態が多い。豊かな人間関係の中で生活していないということになりそうである。

2 子どもをとりまく生活環境

2-1 小中高校生別分析

2-1-1 個人の所有物と家庭の学習環境

まず、「自分の部屋をもっているか」と「家で勉強するとき、自分の机があるか」を質問した結果(表2-1-1)小学生、中学生、高校生と学年が進むにしたがって部屋の所有率は上昇している。しかし、机については、小中学生はそれほど変わらないが、高校生は若干減少している。今日、親の個人部屋、書斎はなくても子どもの8割以上が自らの部屋や机を所有し、プライバシーが守れる空間を確保している。このことが、個人化傾向につながるとはただちに言えないが、家族の中での子どもの存在の重さを示すものといえる。さらに、図2-1-1によって、個人の所有物を見てみよう。いずれも学生が上がるにしたがって、高い所有率になる。小学生は自転車89.6%、ファミコン40.9%、ラジカセ35.1%、中学生は自転車89.3%、ラジカセ68.0%、テレビ29.4%、ステレオ25.2%、高校生は自転車89.3%、ラジカセ69.4%、ステレオ51.7%、コンパクトディスク41.7%、が上位を占めている。小中高校生ともに自転車は約90%の所有率である。ラジカセが中学生、高校生になると約70%の子どもが所有し、その関心の程度の高さを示しているようである。

図2-1-2は、家庭学習の時間をあらわしたものである。一般的に学年が進むにしたがって長

い時間を家庭学習に費やすと考えられるが、この傾向が明らかなのは1時間30分以上の勉強時間においてである。30分から1時間は小学生の方が多く、学年が進むほど少ない。1時間以内の勉強時間は大きな差がないとみられる。高校生は、普通科と職業科による相違があるものと見られる。とくに、高校生は、30分以内の勉強時間が多いということは家庭学習をする生徒としない生徒に分れるためと考えられる。

「学習塾やおけいこ、スポーツなどに通っているか」については、表2-1-2に示されているように、小学生が最も多く、中学生、高校生になると少なくなる。小学生はおよそ5人に4人は通っているが、中学生は5人に3人、高校生は4人に1人ぐらいに減ってしまう。具体的に習っているものをみると、図2-1-3のようである。小学生は算数27.2%、国語16.9%、英語15.3%、中学生は英語74.1%、数学62.0%、国語23.8%、高校生は英語43.0%、数学22.7%、国語10.8%の順になっている。小学5年生から英語が算数、国語に続いて習いごとの3位に入ってきている。

おけいことは小学生に多い(表2-1-3)。とくに、習字が32.2%、ピアノは20.2%であるが、中学生・高校生になると、習字が少なくなり、それに比べてピアノの方が多くなる。習字はやめる

がピアノは続けるという傾向があらわれているようである。スポーツに関しては、その他の方が多く、さまざまに通っているようであるが、小学生の頃は水泳が他のものよりも多いことがわかる。家庭教師は、中学、高校において数学、英語に5-6%程度あるが、他の科目は少ない。小学生での家庭教師は少ない。

「家で勉強している時、わからないことがあったらどうするか」に対しては、複数回答で答えてもらった。自分で調べる場合、「家の参考書、辞書」で調べる方法は、小中高と学年が進むにしたがって高い比率になり、小学生では半分ぐらゐの比率が高校生になると100%近くとなる。「人に教えてもらう」場合、その教えてもらう人は(表2-1-4)、小学生は、母、父、兄、の順に高いが、中学生になると、母、兄、父、高校生になると父母に教えてもらうことが少なくなり、代わりに兄弟や学校の先生になってくる。また、その他の比率が高いのは、友人の占める率ではないかと推察される。高校生では、わからないことがあると60.3%が自分で調べ、45.7%が人に聞く方法をとっている。

次に、「参考書、辞書が何冊くらいあるか」については、学年が進むほど多くなるという一定の傾向はない。およそ5冊以内が半数、10冊位が20-

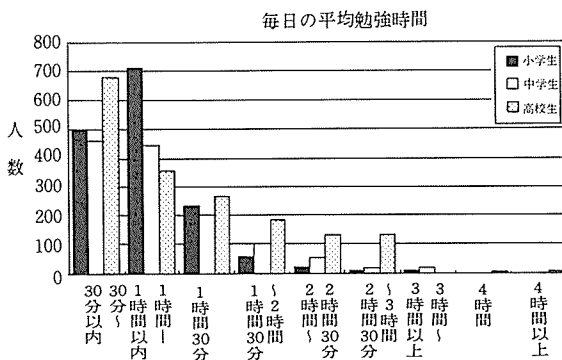


図2-1-2

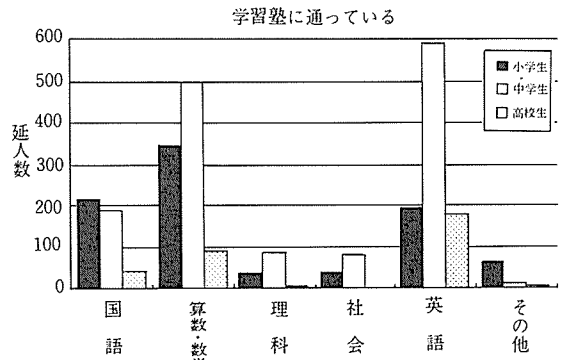


図2-1-3

表2-1-2 塾や習いごとに通っているか

	小学生		中学生		高校生	
塾に通っている	1,300	83.1%	846	64.0%	460	24.7%
通っていない	264	16.9%	475	36.0%	1,402	75.3%
合計	1,564	100.0%	1,321	100.0%	1,862	100.0%

表2-1-3 おけいこ事に通っている

	小 学 生		中 学 生		高 校 生	
ピ ア ノ	252	20.2%	101	12.0%	60	14.4%
エレクトーン	55	4.4%	21	2.5%	22	5.3%
バイオリン	4	0.3%	4	0.5%	4	1.0%
絵 画	12	0.9%	6	0.7%	3	0.7%
習 字	407	32.2%	76	9.0%	29	6.9%
算 盤	—	—	—	—	22	5.3%
そ の 他	256	20.2%	36	4.3%	28	6.7%
スポーツを習っている						
	小 学 生		中 学 生		高 校 生	
水 泳	128	10.0%	4	0.5%	18	4.3%
剣 道	60	4.7%	27	3.2%	8	1.9%
柔 道	26	2.0%	7	0.8%	1	0.2%
バ レ エ	21	1.6%	5	6.0%	0	0.0%
そ の 他	361	28.3%	84	10.0%	56	13.5%
家庭教師						
	小 学 生		中 学 生		高 校 生	
国 語	16	1.2%	22	2.6%	5	1.2%
算 数・数 学	21	1.6%	53	6.3%	21	5.0%
理 科	11	0.8%	21	2.5%	11	2.6%
社 会	12	0.9%	21	2.5%	4	1.0%
英 語	12	0.9%	50	5.9%	24	5.7%
そ の 他	16	1.2%	5	0.6%	3	0.7%

表2-1-4 人に教えて貰う

	小 学 生		中 学 生		高 校 生	
父	671	43.2%	258	19.7%	48	5.5%
母	1,035	66.6%	324	24.8%	55	6.3%
兄 弟	448	28.8%	392	30.0%	194	22.3%
塾 の 先 生	92	5.9%	208	15.9%	81	9.3%
学 校 の 先 生	121	7.9%	165	12.6%	188	21.6%
家 庭 教 師	13	0.8%	46	3.5%	39	4.5%
そ の 他	57	3.7%	123	9.4%	506	58.0%

30%程度であわせて10冊ぐらいもっているのが80%を占めている。「参考書は誰が買ってくれるか」については、小学生は母67.0%、父35.7%、自分16.5%、中学生は母58.4%父24.5%、自分31.2%、高校生は母36.8%、父13.6%、自分50.3%である。小中高校生になるにしたがって、父母の比率が減少し、自分で買うようになる傾向が示されている。そして、「ふだん読む本の種類」(図2-1-4)は、小学生は、漫画77.1%、マガジン雑

誌39.1%、中学生は、漫画76.7%、マガジン雑誌53.5%、推理探偵31.4%、高校生は、漫画53.5%、マガジン雑誌52.7%、推理探偵、SF小説34.6%という順位である。小中高生のいずれも漫画が多く、マガジン雑誌が次に多い。文学全集は中学生で少なく、童話は小学生が26.3%読んでいる。

以上のように、個人の所有物、勉強時間、勉強の仕方、参考書や読む本を小中高校生別に検討すると、子どもの成長によって相違する行動に比べ、

耐久消費的なものは学年に関連なく多く所有している。家庭学習は必ずしも学年が進むにしたがって増えるわけではなかったのは、高等学校の学んでいる科による違いという予測があった。そして、学年が進むにしたがって父母を頼らずきょうだいや友人という同世代の人間関係を求める点が学習の面でも明らかになった。

2-1-2 家族環境

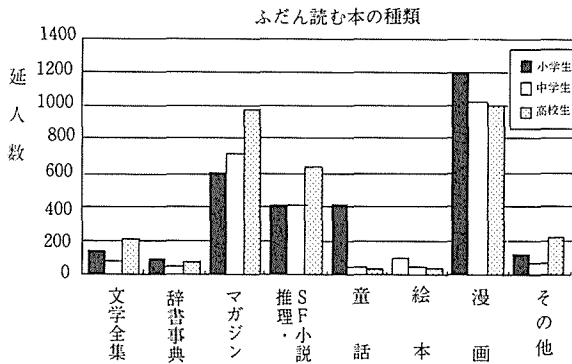


図2-1-4

家族構成、きょうだい数、家族内外の人間関係、父母のイメージについて質問した。

いつも一緒に生活している人は、小中高校生ともに同じような傾向を示している。父(91%)、母(98%)、祖父(14-20%)、祖母(31-35%)、兄は小中学生では、31-32%であるが高校生になると他出しているせいか18%に減少する。姉は小中学生では29%、高校生は23%に減少し、逆に弟は小中学生で29%、高校生で33%と多くなる。同様に妹も小中学生では27-28%、高校生が30%となる。家族の人数は4人が最も多く、約36%、5人が27-29%、6人が15-20%で、ほとんど3-6人の家族の中にある。山梨県の平均世帯人数が1985年3.35人であることから見ると直系家族形態が多いこともあり、多い世帯人数である。きょうだいの数も2人が51-55%、3人が32-38%を占め、小学生で一人子が8%あるが、中高校生では5%程度である。そして、対象者が兄弟の何番目かについては長子である比率が高く約45%、2番目は約38-42%となっている。

表2-1-5 家族の中でもっとも頼りにしている人は誰か

	小学生		中学生		高校生	
父	656	43.2%	536	44.9%	779	42.8%
母	718	47.3%	493	41.3%	659	36.2%
祖父	13	0.9%	9	0.8%	9	0.5%
祖母	37	2.4%	15	1.3%	19	1.0%
兄	38	2.5%	43	3.6%	56	3.1%
姉	26	1.7%	49	4.1%	66	3.6%
弟	2	0.1%	4	0.3%	10	0.5%
妹	7	0.5%	4	0.3%	6	0.3%
叔父、叔母	5	0.3%	4	0.3%	10	0.5%
その他	16	1.1%	38	3.2%	208	11.0%

表2-1-6 家族以外に頼りにしている人は誰か

	小学生		中学生		高校生	
同じ年の友人	915	59.0%	897	67.7%	1377	79.5%
年上の友人	233	15.0%	168	12.7%	254	14.7%
年下の友人	53	3.4%	16	1.2%	34	2.0%
近所の人	122	7.9%	39	2.9%	35	2.0%
親戚の人	557	35.9%	272	20.5%	235	13.6%
学校の先生	341	22.0%	149	11.3%	203	10.7%
塾の先生	71	4.6%	60	4.5%	47	2.7%
その他	39	2.5%	24	1.8%		8.9%

表2-1-7 家族の上でもっともうるさいのは誰か

	小 学 生		中 学 生		高 校 生	
父	151	10.5%	161	13.4%	338	18.6%
母	397	27.6%	570	47.5%	863	47.4%
祖祖 父父	34	2.4%	28	2.3%	24	1.3%
祖祖 母母	88	6.1%	99	8.3%	99	5.4%
兄	144	10.0%	75	6.3%	47	2.6%
姉	158	11.0%	80	6.7%	76	4.2%
弟	202	14.1%	58	4.8%	93	5.1%
妹	174	12.1%	86	7.2%	100	5.5%
叔父、叔母	10	0.7%	6	0.5%	14	0.8%
その他の他	79	3.5%	37	3.1%	168	9.2%

表2-1-8 家族の中でもっとも怖いのは誰か

	小 学 生		中 学 生		高 校 生	
父	543	47.9%	645	63.2%	907	51.1%
母	335	25.0%	207	20.3%	264	14.9%
祖祖 父父	31	2.3%	20	2.0%	19	1.1%
祖祖 母母	20	1.5%	20	2.0%	18	1.0%
兄	140	10.5%	71	7.0%	74	4.2%
姉	83	6.2%	36	3.5%	32	1.8%
叔叔 父	1	0.1%	1	0.1%	7	0.4%
叔 母	3	0.2%	1	0.1%	6	0.3%
そ の 他	84	6.3%	20	2.0%	448	25.2%

次に、子どもの人間関係をみてみよう。表2-1-5は家族の中で最も頼りにしている人、表2-1-6は家族以外で最も頼りにしている人を示したものである。家族内で頼りにしている人は、小学生では母(47.3%)であるが、中学生、高校生になると母から父(43-45%)へと逆転する。しかし、父も母も小中高校生と学年が進むにしたがって減少し、兄、姉、その他の比率が高くなる。家族以外で頼りにしている人は、同年の友人が60%以上を示し、友人関係の強さを示している。親戚の人や学校の先生は学年が進むにしたがって減少してくるが、小学生は3人に1人が親戚の人を頼りにしている点は注目される。また、学校の先生の比率が小学生22%、中高校生11%の程度でよいのかどうか、見方によってはもっと頼りにされてもよいとみられるが、このくらいの比率であろうとも考えられるところである。

家族で最もうるさいのは(表2-1-7)、小中高校生ともに母である率が最も高い。しかし、小

学生は、うるさいということを口うるさいという意味ではなく、単なるうるさいと思ったか、あるいはうるさい人というときの日頃のイメージ、感じていることから、きょうだいの存在がある。そのため、中学生、高校生よりも母の割合が低いが、父よりも母がうるさいと感じている点には変わりがない。また、父についても、学年が進むにしたがって、いろいろと言うことが多いのか、父の存在が必要なせい、うるさいとする率が高くなっている。

家族の中で最も怖い存在は(表2-1-8)、父であることが示されている。とくに、中学生は63.2%と最も高い。母が怖いというのは、小学生25.0%、中学生20.3%、高校生14.9%と学年が進むにしたがって減少する。父は、小学生では怖いと感じている子どもは、中高校生に比べるとやや少ないが、母よりも怖い存在である点には変わりがない。兄や姉が怖い率は、学年が進むにしたがって減少するが、男女別による相違があるよう

に思われる。

勉強以外で困ったとき、最初に相談するのは誰か、について（表2-1-9）検討すると、小学生は母（56.1%）が最も多いが、中学生（25.3%）、高校生（17.0%）になると、母の比率は減少する。そして、友達が中学生（44.6%）、高校生（58.9%）というように増加してくる。父についても、小中高校生の順に少なくなる。「誰もいない」が、中学生10.0%、高校生8.6%と小学生5.3%よりも中高校生で多くなる点は注目される。また、兄、姉など自分よりも上のきょうだいの存在も大切なようである。

「父のようになりたいか」（図2-1-5）、「母のようになりたいか」（図2-1-6）についての結果、いずれも「どちらとも言えない」という比

率が高く、父母のイメージが不明確であることが、示されている。男の子は父親をモデルに、女の子は母親をモデルに社会化されると言われるが、現代の子どもは、父母像が不明確になっているとみてよいのであろうか。男の子に対して、お父さんのようになりたいと思うかについて、肯定的である子どもは、小学生39.2%、中学生30.2%、高校生23.6%と減少している。なりたくないと否定的な回答は高校生で23.6%と多くなっている。「どちらともいえない」という答は、小中高校生で45-55%であり、学年の進行によって変化するというようではないようである。いずれにしても、父親像がつかみにくい時代であることは確かなようである。また、このような結果は、父の存在、役割について子どもの側から捉えなおさなければなら

表2-1-9 勉強以外で最初に相談する人は誰か

	小学生		中学生		高校生	
父	150	9.7%	84	6.5%	6161	3.3%
母	863	56.1%	326	25.3%	317	17.0%
祖父	7	0.5%	0	0	3	0.2%
祖母	23	1.5%	7	0.5%	3	0.2%
兄	45	2.9%	39	3.0%	45	2.4%
姉	78	5.1%	76	5.9%	79	4.2%
弟	6	0.4%	5	0.4%	8	0.4%
妹	14	0.9%	9	0.7%	16	0.9%
叔父	4	0.3%	1	0.1%	4	0.2%
叔母	3	0.2%	1	0.1%	3	0.2%
学校の先生	17	1.1%	16	1.2%	13	0.7%
塾の先生	3	0.2%	3	0.2%	5	0.3%
友達	232	15.1%	575	44.6%	1097	58.9%
近所の人	0	0	1	0.1%	0	0
誰もいない	82	5.3%	129	10.0%	161	8.6%
その他	12	0.8%	18	1.4%	49	2.6%

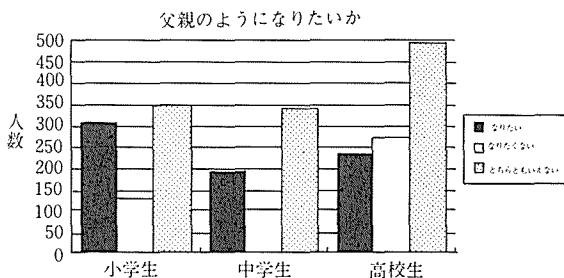


図2-1-5.

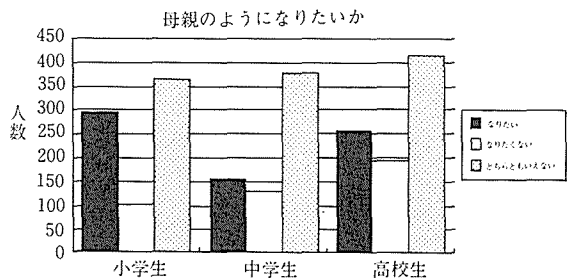


図2-1-6.

ない結果といえよう。

母については、多くの子どもが日常生活の姿を見、イメージがつかみやすい状態と思われるが、女の子も母親のようにになりたいかについては男の子の父親象と同様の傾向を示している。母親のようにになりたいという比率は、小学生の頃は38.9%と中学生23.8%、高校生29.9%よりも高く、中学生が最も低い。なりたくないのは父親象と同様、高校生が22.4%と多くなっている。いずれにしても中高校生になると否定的なイメージをもっていることが明らかになったが、さらに注目されるのは、父母像のイメージが不明確であることである。

2-1-3 地域環境と社会参加

地域環境は子どもにとっての物的環境（騒音、遊び場、自動販売機など）と人的環境（注意してくれる人）そして、社会参加について質問した。「あなたの家は、自動車や電車などの音がうるさく感じますか」について、「大変うるさい」「うるさいほうだ」をあわせると、小学生32.7%、中学生26.4%、高校生25.4%となる。「うるさくない」が約50%程度あり、それほどうるさい環境とは感じていないことが示されている。「近所に人の出入りの多いところがありますか」(複数回答)では、表2-1-10によると、小中高校生ともに最も多いのは「大きな商店やマーケット」である(30-40%)。

次いで、書店、スナック・バーのある比率が高い。パチンコ店、マージャン店は学年が進むにしたがって少しずつ上昇しているのは、関心の程度を示すものであろうか。さらに、近所に自動販売機があるかをみると、小中高校生のいずれにおい

ても約80%程度も近くにある。そして、それらは何を売っているかを質問したところ、ジュース類は90%以上、タバコは約50-60%、酒は小学生(23.7%)、中学生(25.1%)、高校生(37.3%)の比率であった。酒類の比率は小中高校生になるにしたがって増加している。このことも物的な環境が関心の程度によって、子どもたちの視野に入っていることを意味しているのではないかと考えられる。

「家の近くで遊んでいて、危険なときやけんかなどをしている時に注意してくれる人がいますか」の質問に対して、「ある」と答えた小学生は68.8%、中学生65.2%、高校生60.5%である。学年が進むにしたがって少なくなる。

また、「家の近くに遊び場や広場がありますか」については、小学生83.1%、中学生67.6%、高校生46.4%とすくなくなる。このような遊び場、広場についても、自分が遊べるような空間、という理解の仕方をしているようである。高校生になると少なくなるのは、遊びの意味が異なってくるからと考えられるが、中高校生が楽しめるような空間が社会的には整備されていないとも言えよう。遊び場はどれかを複数回答で求めた結果、広場は小学生(37.6%)、中学生(40.3%)、高校生(12.5%)、公園は小中学生ともに約30%、高校生(21.7%)をあげている。その他、近所の道路や神社を小中学生は16-20%程度をあげているが高校生は少ない。しかし、高校生は50%以上が友達の家を挙げている点は注目される。高校生になると友達の家の個人部屋ということになるのか、小中学生とは違っている。「少し遠くの公園や学校

表2-1-10 近所に人の出入りの多い所がありますか(複数回答)

	小 学 生		中 学 生		高 校 生	
パチンコ店	94	9.9%	80	17.3%	301	23.9%
ゲームセンター	37	3.9%	40	8.7%	94	7.5%
マージャン店	8	0.8%	16	3.5%	56	4.4%
スナックバー	137	14.5%	105	22.7%	284	22.5%
大きい商店等	366	38.7%	187	40.5%	389	30.9%
書店	151	16.0%	125	27.1%	268	21.3%
スポーツガーデン	—	—	—	—	91	7.2%
ビリヤード	—	—	—	—	106	8.4%
その他	199	21.1%	90	19.5%	507	40.3%

表2-1-11 少し遠くの公園などに遊びに行きますか

	小学生		中学生		高校生	
よく行く	162	10.5%	54	4.1%	29	1.7%
時々行く	1236	80.0%	557	42.5%	406	23.4%
全く行かない	147	9.5%	700	53.4%	1297	74.9%
合 計	1545	100.0%	1311	100.0%	1732	100.0%

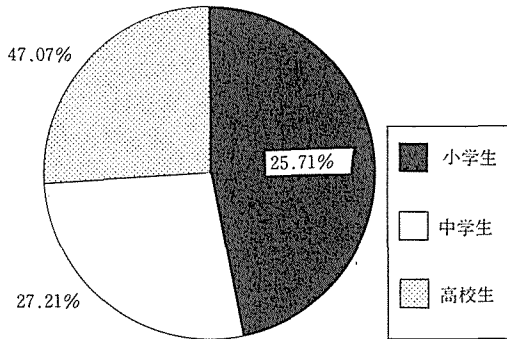


図2-1-7

学校を一週間以上休んだことがあるか。

の校庭などに遊びに行きますか」(表2-1-11)をみると、「よく行く」「時々行く」は小中高校生の順に多い。逆に「全く行かない」は学年が進むにしたがって多くなる。小学生は90%以上の子どもが遊びに行っているが、中学生は46.6%と行く比率が半減し、高校生になると中学生の半分になる。このようにみると、小学5年生から中学2年生までの3年間で急激に遊びや行動範囲が変わり、中学2年生から高校2年生にかけても大きな変化をしている。中学2年生の時期はこの変化の大きな中間の時期にあるといえる。

「スポーツクラブや町、村の活動」について複数回答で質問した。その結果、子どもクラブに小学生61.6%、中学生55.8%が加入している。高校生は子どもクラブの加入はないと予想されたので質問を設けなかったが、ほとんどの生徒(76.7%)は入っていない。野球、サッカーは小学生で25.0%、中学生で13.9%の加入率である。そして、その活動は、年間数回が小学生40.6%、中学生62.7%、週2-3回は小学生22.5%、中学生6.8%、ほぼ毎日小学生13.3%、中学生17.8%、高校生62.0%である。このようにみると、活動している場合の練習は、小中学生では、年数回程度が多いが、高校生になるとほぼ毎日ほとんど活動している生徒としない生徒が分かれてきて、活動する場合

はほとんど毎日ほど熱心であることが示された。

2-1-4 学校の出欠動向と生活実感

本調査は一般的な子どもの生活環境の実態をさぐり、その中から問題をもつ子を探ることが一つのねらいである。したがって、一般的な子どもの学校における出欠動向を検討し、長期欠席の子どもの環境と比較することの出来る資料を得ることは重要な作業である。そこで、長期欠席の子どもの広い背景を知る出欠動向と生活実感について検討する。

まず、「学校を1週間以上休んだことがあるか」について、「ある」と答えた比率は、小学生22.4%、中学生15.1%、高校生10.2%である。この小中高校生の「ある」比率を100%として、小中高校生の割合をみると図2-1-7のようになる。1週間以上休んだ子どもは小学生で多い。これを表2-1-12で、休んだ期間をみると、10日以上は小中高校生になるにしたがって少ない。20日以上をみると、小学生は10.3%、中学生は18.3%、高校生は15.2%となり、中学生の高さは注目される。これは30日以上をみても明らかである。この小中学生の合計40ケースは、同じ学校を対象とした長期欠席の対象者数40ケースと一致する。内訳は小学生20ケース、中学生20ケースであるので、多少の相違があるが、数は一致していることになる。

「欠席の主な理由」は、「身体の具合が悪い」が多い。それは小中高校生と学年が進むにしたがって減少しているが、「けが」の比率はそれほど高くないが逆に学年が進むにしたがって増加している点は注目される。また、「気分が悪くなる」「何となく行きたくない」「おもしろくない」も学年が進むにしたがって増加している点は注目される。

次に、生活実感について、「自分の家はいろいろなものに恵まれているか」については、図2-1-8にあるように、肯定的な答えは、中学生が低い。否定的な答えや、「どちらともいえない」答えは、

小中高校生と学年が進むにしたがって増加している。また、「わからない」は、学年が進むほど少なくなり、自分の家族の経済的な水準やいろいろな位置づけがわかってくるとみられる。

生活の満足度については、表2-1-13に示した。これによると、満足度は、小中高校生と学年が進むにしたがって低くなる。逆に、「満足していない」「わからない」は、学年が進むにしたがって増加傾向を示している。生活の満足度は学年が高くなるほど低くなることは、さまざまな欲求のあ

ることを示しているともみられる。

これらのことは、悩みごとの有無とも関連した傾向を示しているようである。すなわち、悩みごとは、小学生39.1%、中学生51.2%、高校生71.4%と学年が進むほど多くなる(表2-1-14)。悩みの内容を見る(複数回答)と、小学生は友達のことと勉強のことが42.5%、中学生は勉強のこと74.9%、友達のこと35.1%、高校生は進路62.9%、勉強のことが47.6%、自分自身のこと40.1%、異性のこと32.3%となる。高校生になると悩みの内容も多様になり、自分自身のことや進路、人間関係の悩みなど、青年期の特徴的な課題が直接悩みとなってあらわれているようである。主な悩みは何かとみてみると、小学生は友達、中学生は勉強、高校生は進路のことになる。悩みの内容を学年別にみると、友達、家庭、病気、学校のことは、小学生が多く、学年が進むにしたがって少なくなる。しかし、勉強については中学生が最も悩んでいることが明らかになった。

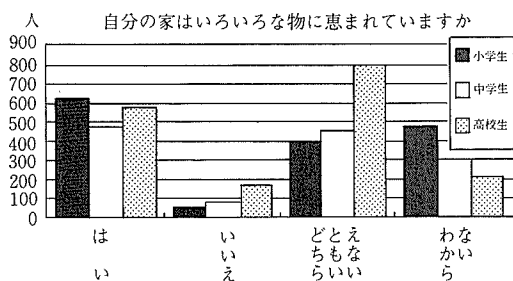


図2-1-8

表2-1-12

①休んだ期間

	小学生		中学生		高校生	
10日以内	218	63.7%	115	58.4%	103	55.7%
10～19日以内	89	26.0%	46	23.4%	54	29.2%
20～29日以内	18	5.3%	13	6.6%	14	7.6%
30日以上	17	5.0%	23	11.7%	14	7.6%

②欠席の主な理由

	小学生		中学生		高校生	
身体の具合が悪い	284	82.8%	145	73.2%	118	61.1%
けが	26	7.6%	17	8.6%	19	9.8%
気分が悪くなる	2	0.6%	3	1.5%	3	1.6%
何となく行きたくない	4	1.2%	8	4.0%	17	8.8%
おもしろくない	0	0	7	3.5%	7	3.6%
その他	27	7.9%	18	9.1%	29	15.0%

表2-1-13 現在の生活の満足度

	小学生		中学生		高校生	
満足している	906	58.2%	522	39.7%	584	31.1%
満足していない	148	9.5%	213	16.2%	514	27.4%
どちらともいえない	296	19.0%	399	30.4%	668	35.6%
わからない	206	13.2%	180	13.7%	112	6.0%

表 2-1-14

①悩み事はあるか

	小 学 生		中 学 生		高 校 生	
あ る	601	39.1%	671	51.2%	1231	71.4%
な い	938	60.9%	640	48.8%	533	28.6%
合 計	1539	100.0%	1311	100.0%	1864	100.0%

②悩みの内容

	小 学 生		中 学 生		高 校 生	
友 達	257	42.5%	236	35.1%	220	16.5%
異 性	—	—	—	—	432	32.3%
家 庭	119	19.7%	123	18.3%	224	16.8%
病 気	62	10.3%	30	4.5%	69	5.2%
学 校	117	19.4%	126	18.8%	177	13.2%
勉 強	257	42.5%	503	74.9%	636	47.6%
進 路	—	—	—	—	840	62.9%
自 分 自 身	—	—	—	—	536	40.1%
そ の 他	119	19.7%	122	18.2%	83	6.2%

③主たる悩みは何か

	小 学 生		中 学 生		高 校 生	
友 達	181	31.0%	138	20.8%	31	1.6%
異 性	—	—	—	—	167	7.2%
家 庭	88	15.1%	51	7.7%	47	2.5%
病 気	35	6.0%	15	2.3%	15	0.8%
学 校	46	7.9%	34	5.1%	2	1.1%
勉 強	155	26.6%	336	50.7%	168	8.9%
進 路	—	—	—	—	353	18.6%
自 分 自 身	—	—	—	—	165	8.7%
そ の 他	78	13.4%	89	13.4%	39	2.1%

2-2 男女別の分析

2-2-1 個人の所有物と家庭の学習環境

個人の所有物を小中学生と高校生別に男女差があるかどうかを検討した。それによると小中学生でも高校生でもほとんどの個人的所有物は男子が女子よりも多くもっている(図 2-2-1、図 2-2-2)。小中学生では、個人部屋や机は男女の差がないが、ラジカセのみは、女子の所有率が高い。この傾向は高校生についても同様の傾向がある。とくに、男子の所有率の高いものは、テレビ、CD、パーソナル・コンピュータ、ファミコンといった機械類である。

家庭での平均勉強時間(表 2-2-1)は、30

分以内と短い時間は男子が多く、小中高校生ともに女子の方が長い時間勉強する傾向があるようにみられる。しかし、3時間以上になると中高校生とも男子の方が高い傾向を示している。

「学習塾やおけいこ、スポーツ」についての男女差は、図 2-2-3 から図 2-2-8 に示したようである。学習塾については、高校生では女子において英語を習っている率が若干高いほか、ほとんどの科目は男子の習っている比率が高い。おけいこごとについては、男子と女子には明らかに差があり、おけいことはピアノをはじめほとんど女子が多いことが示されている。また、スポーツも、高校生の水泳、小中学生のバレーにおいて

表 2-2-1

家での平均勉強時間

(上段は実数、下段は%)

	小 学 生			中 学 生			高 校 生		
	男 子	女 子	合 計	男 子	女 子	合 計	男 子	女 子	合 計
30 分 以 内	305 37.5	197 26.2	502 32.1	230 35.1	227 34.9	457 35.0	414 40.7	263 31.0	677 36.3
30 分 - 1 時 間	354 43.5	360 47.8	714 45.6	218 33.2	225 34.6	443 33.9	165 16.2	189 22.3	354 19.0
1 時 間 - 1 時 間 30 分	107 13.2	125 16.6	232 14.8	100 15.2	109 16.8	209 16.0	135 13.3	134 15.8	269 14.4
1 時 間 30 分 - 2 時 間	26 3.2	38 5.0	64 4.1	53 8.1	46 7.1	99 7.6	104 10.2	84 9.9	188 10.1
2 時 間 - 2 時 間 30 分	11 1.4	15 2.0	26 1.7	31 4.7	27 4.2	58 4.4	67 6.6	67 7.9	134 7.2
2 時 間 30 分 - 3 時 間	4 0.5	10 1.3	14 0.9	10 1.5	9 1.4	19 1.5	72 7.1	67 7.9	139 7.5
3 時 間 以 上	6 0.7	8 1.1	14 0.9	14 2.1	7 1.1	21 1.6	60 5.9	44 5.2	104 5.6
合 計	813 51.9	753 48.1	1,566 100.0	656 50.2	650 49.8	1,306 100.0	1,017 54.5	848 45.5	1,865 100.0

個人の所有物(小中学生)

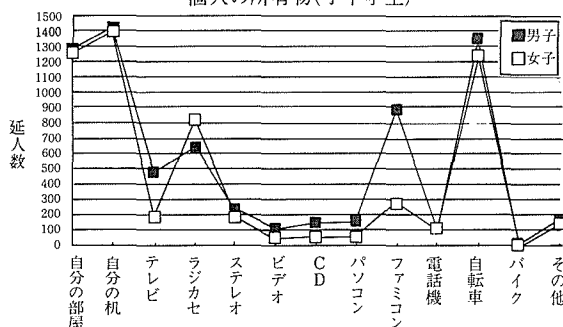


図 2-2-1

個人の所有物(高校生)

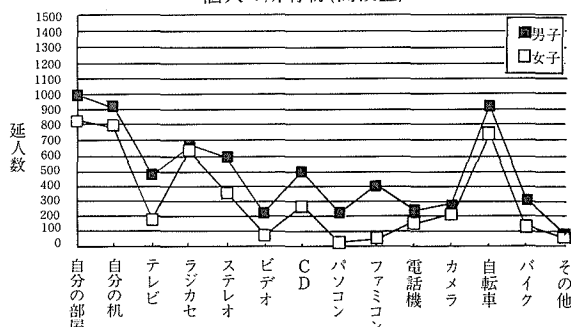


図 2-2-2

学習塾(小中学生)

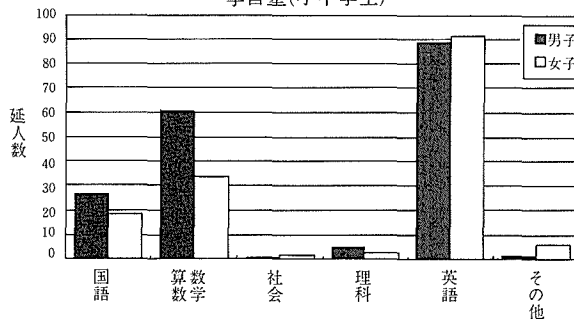


図 2-2-3

学習塾(高校生)

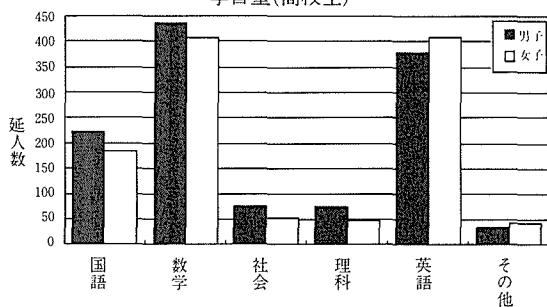


図 2-2-4

おけいごと(小中学生)

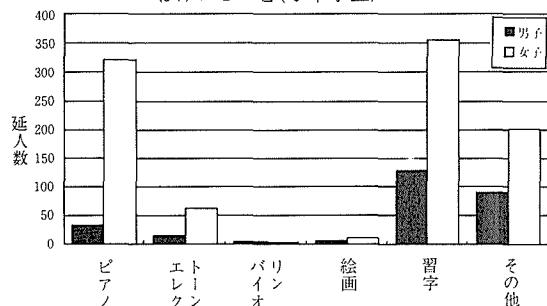


図 2-2-5

おけいごと(高校生)

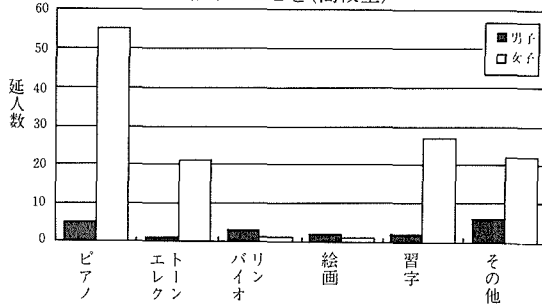


図 2-2-6

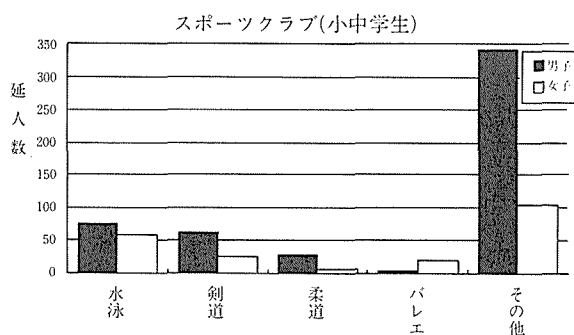


図2-2-7

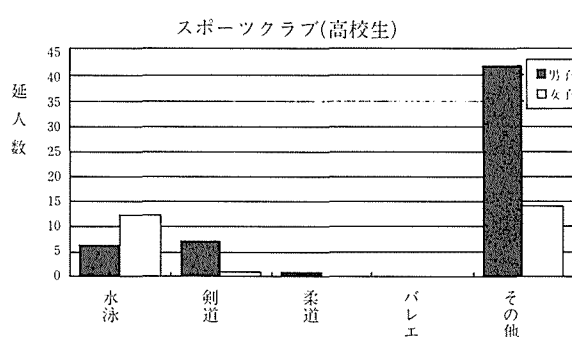


図2-2-8

表2-2-2 人に教えて貰う

	小 中 学 生				高 校 生			
	男 子		女 子		男 子		女 子	
父	452	30.8%	477	34.2%	20	5.1%	28	5.8%
母	645	44.0%	714	41.2%	21	5.4%	34	7.1%
兄 弟	364	24.8%	476	34.1%	94	24.1%	100	20.8%
塾 の 先 生	133	9.1%	167	12.0%	41	10.5%	40	8.3%
学 校 の 先	126	8.6%	160	11.5%	74	19.0%	114	23.8%
家 庭 教 師	22	1.5%	37	2.9%	15	3.8%	24	5.0%
そ の 他	65	4.5%	114	8.2%	218	55.6%	288	60.0%

女子が多い他は、男子の比率が高いことがわかる。このように、塾とスポーツは男子、おけいごとは女子がする傾向が明確に示されている。男女の育て方の相違がこのようなところにあらわれていることは興味深いところである。知識、情緒、体力というように考えれば、女子は情緒的なおけいごと、男子は体力と知識に力をいれているとみてよいかも知れない。

次に、「家で勉強しているとき、分からないことがあったら誰に教えてもらうか」について(表2-2-2)、小中学生では、男女ともに母の率が高いが、父を見ると女子の率が高く、母に男子が教えてもらう率が高い点は興味深いところである。そして、女子の方が塾や学校の先生に教えてもらう率が若干高く、高校生は男子において兄弟の率が高いことがわかる。

「参考書などを買ってもらう人」は、女子の方が男子よりも母の比率が高く(小中学生は69.5%、高校生は44%)、男子は自分で買うことが女子よりも多い。

「いつも読む本の種類」は、女子は文学全集、

SF、童話が多い。男子は、マガジン雑誌が多く、漫画は、小中学生では男子、高校生は女子の比率が高くなっている。

以上のように、個人の所有物、勉強時間、勉強の仕方、参考書や読む本を男女別に検討すると、男子はさまざまな機械物を女子よりも多く持っていること、勉強時間は女子よりも少ない傾向があるが、長時間勉強する子どもとしない子どもに差があるという点、男子の方が参考書を買うときなど自分で買うなど依存的でない姿が浮き彫りにされた。また、塾やおけいごとにも明確な男女差があることがわかった。女子は、根気よく長時間勉強し、文学全集、SFなどを男子よりも読み、参考書などは母親に買ってもらうなど依存的な面が男子よりも強い傾向が明らかになった。

2-2-2 家族環境、地域環境、社会参加

まず、家で一番頼りにしている人(表2-2-3)をみると、小中高生ともに男子は父親、女子は母親を頼りにしていることがわかる。また兄の存在は女子に比べ重要であるように思われる。女子は姉の比率が男子に比べると高いことは注目に値

しょう。高校生の男子は、家族の中心的なメンバーではない「その他」の比率が高いことも注目すべき傾向であろう。「家族以外で頼りにしている人」(表2-2-4)では、女子において同年の友人の比率が高い。女子は男子よりも友人関係を頼っている傾向が示されている。男子は小中学生では親戚の人や近所の人、高校生では学校の先生、その他が多い。「勉強以外で最初に相談する人」(表2-2-5)は、男女ともに小学生で母、中学生で塾の先生、高校生では友達を上げている。最初に相談する人の比率では男女差はあまりないが、男女差があると思われるのは、小学生であり、女子は友人や姉の比率が高いのに比べ、男子は誰もいない率が高い。また女子よりも父親の比率が高くなるのは注目すべきところである。これは高校生においても同様である。中高校生になると、女子よりも父親の存在がより重要であることを子ど

もの立場からも示しているように思われる。

表2-2-6は、父母像を示したものである。男女の違いは小中学生では、男子の方が肯定的であるのに比べ、高校生では女子の方が肯定的である。また、高校生では、男子は否定的な傾向が強い。「どちらともいえない」においても、小中学生は女子の方が多いが、高校生では男子の方が多くなる。男子は高校生ぐらいになると父親を否定的、批判的にみる傾向が女子の母親像よりも強いようである。

次に、地域環境と社会参加に男女差があるかをみると、人の出入りの多いところについては、高校生の男子ではパチンコ店があると回答している比率が27.7%と女子の18.8%よりも多い。女子が男子よりも多いところは、小中学生では大商店やマーケット(女子42.0%>男子37.0%)、高校生ではスナック・バー(女子23.0%>男子21.5%)で

表2-2-3 家で一番頼りにしているのは誰か

(上段は実数、下段は%)

	小 学 生			中 学 生			高 校 生		
	男 子	女 子	合 計	男 子	女 子	合 計	男 子	女 子	合 計
父 親	420 53.4	236 32.2	656 43.2	334 57.8	202 32.7	536 44.9	564 56.8	215 25.9	779 42.8
母 親	280 35.6	438 59.8	718 47.3	154 26.6	339 54.9	493 41.3	205 20.6	454 54.8	659 36.2
祖 父	8 1.0	5 0.7	13 0.9	5 0.9	4 0.6	9 0.8	6 0.6	3 0.4	9 0.5
祖 母	26 3.3	11 1.5	37 2.4	6 1.0	9 1.5	15 1.3	7 0.7	12 1.4	19 1.0
兄	26 3.3	12 1.6	38 2.5	33 5.7	10 1.6	43 3.6	36 3.6	20 2.4	56 3.1
姉	7 0.9	19 2.6	26 1.7	14 2.4	35 5.7	49 4.1	15 1.5	51 6.2	66 3.6
弟	1 0.1	1 0.1	2 0.1	3 0.5	1 0.2	4 0.3	7 0.7	3 0.4	10 0.5
妹	3 0.4	4 0.5	7 0.5	0 0.0	4 0.6	4 0.3	2 0.2	4 0.5	6 0.3
お じ、お ば	3 0.4	2 0.3	5 0.3	4 0.7	0 0.0	4 0.3	6 0.6	4 0.5	10 0.5
そ の 他	12 1.5	4 0.5	16 1.1	25 4.3	13 2.1	38 3.2	145 14.6	63 7.6	208 11.4
合 計	786 51.8	732 48.2	1,518 100.0	578 48.4	617 51.6	1,195 100.0	993 54.5	829 45.5	1,822 100.0

表2-2-4 家族以外に頼りにしている人は誰か

(上段は実数、下段は%)

	小 中 学 生				高 校 生			
	男 子		女 子		男 子		女 子	
同 じ 年 の 友 人	769	52.4%	1,043	74.1%	651	70.7%	726	89.4%
年 上 の 友 人	199	13.6%	202	14.4%	128	13.9%	126	15.5%
和 下 の 友 人	34	2.3%	35	2.5%	19	2.1%	15	1.8%
近 所 の 人	98	6.7%	63	4.5%	24	2.6%	11	1.4%
親 戚 の 人	456	31.1%	373	26.5%	138	1.5%	97	11.9%
学 校 の 先 生	0	0			123	13.3%	80	9.9%
塾 の 先 生	75	5.1%	56	4.0%	31	3.4%	16	2.0%
そ の 他	43	2.9%	20	1.4%	111	12.0%	44	5.4%

表 2-2-5 勉強以外で最初に相談する人は誰か (上段は実数、下段は%)

	小 学 生			中 学 生			高 校 生		
	男 子	女 子	合 計	男 子	女 子	合 計	男 子	女 子	合 計
父 親	115 14.4	35 4.7	150 9.7	76 12.0	8 1.2	84 6.5	53 5.3	8 0.9	61 3.3
母 親	438 54.8	425 57.4	863 56.1	167 26.4	159 24.2	326 25.3	170 16.9	147 17.2	317 17.0
祖 父	6 0.8	1 0.1	7 0.5	3 0.5	4 0.6	7 0.5	3 0.3	0 0.0	3 0.2
祖 母	14 1.8	9 1.2	23 1.5	31 4.9	8 1.2	39 3.0	3 0.3	0 0.0	3 0.2
兄	36 4.5	9 1.2	45 2.9	21 3.3	55 8.4	76 5.9	38 3.8	7 0.8	45 2.4
姉	26 3.3	52 7.0	78 5.1	5 0.8	0 0.0	5 0.4	24 2.4	55 6.4	79 4.2
弟	6 0.8	0 0.0	6 0.4	3 0.5	6 0.9	9 0.7	8 0.8	0 0.0	8 0.4
妹	5 0.6	9 1.2	14 0.9	1 0.2	0 0.0	1 0.1	1 0.1	15 1.8	16 0.9
お じ	3 0.4	1 0.1	4 0.3	0 0.0	1 0.2	1 0.1	3 0.3	1 0.1	4 0.2
お ば	1 0.1	2 0.3	3 0.2	12 1.9	4 0.6	16 1.2	2 0.2	1 0.1	3 0.2
学校の先生	8 1.0	9 1.2	17 1.1	3 0.5	0 0.0	3 0.2	9 0.9	4 0.5	13 0.7
塾の先生	3 0.4	0 0.0	3 0.2	211 33.2	364 55.4	575 44.6	5 0.5	0 0.0	5 0.3
友 達	73 9.1	159 21.5	232 15.1	0 0.0	1 0.2	1 0.1	530 52.6	567 66.2	1,097 58.9
誰もいない	59 7.4	23 3.1	82 5.3	91 14.4	38 5.8	129 10.0	131 13.0	30 3.5	161 8.6
そ の 他	6 0.8	6 0.8	12 0.8	9 1.4	9 1.4	18 1.4	28 2.8	21 2.5	49 2.6
合 計	799 51.9	740 48.1	1,539 100.0	633 49.1	657 50.9	1,290 100.0	1,008 54.1	856 45.9	1,864 100.0

表 2-2-6 父親あるいは母親のようにになりたいか (男子は父親に対して 女子は母親に対して)

	小 中 学 生				高 校 生			
	男 子		女 子		男 子		女 子	
な り た い	504	35.1%	447	31.8%	235	23.4%	257	30.1%
な り た く な い	238	16.6%	233	16.6%	274	27.3%	190	22.2%
ど ち ら と も い え な い	692	48.3%	725	51.6%	495	49.3%	407	47.7%

表 2-2-7 休んだ期間 (上段は実数、下段は%)

	小 学 生			中 学 生			高 校 生		
	男 子	女 子	合 計	男 子	女 子	合 計	男 子	女 子	合 計
10 日 以 内	123 69.1	95 57.9	218 63.7	63 55.8	52 61.9	115 58.4	58 51.8	45 61.6	103 55.7
10-19 日 以 内	38 21.3	51 31.1	89 26.0	27 23.9	19 22.6	46 23.4	33 29.5	21 28.8	54 29.2
20-29 日 以 内	8 4.5	10 6.1	18 5.3	9 8.0	4 4.8	13 6.6	12 10.7	2 2.7	14 7.6
30 日 以 上	9 5.1	8 4.9	17 5.0	14 12.4	9 10.7	23 11.7	9 8.0	5 6.8	14 7.6
合 計	178 52.0	164 48.0	342 100.0	113 57.4	84 42.6	197 100.0	112 60.5	73 39.5	185 100.0

ある。これらの結果もある程度関心の程度によって相違するようである。

「スポーツクラブや町村の活動」についてみると、小中学生では女子の方が子どもクラブの加入は(女子64.5%>男子53.5%)多く、野球やサッカーは男子が圧倒的に多い。入っていない率も女子が多い(小中学生では女子28.6%>男子22.7%、

高校生では女子85.8%>男子69.1%)。

2-2-3 学校の出欠動向と生活実感

表 2-2-7 は、小中高校別男女別に休んだ期間を示したものである。これによると、小学生では、男女のどちらが長期欠席傾向があるとは明確ではなさそうである。ところが中学生になると、女子は10日以内は高い比率であるがそれ以上にな

ると男子が高い比率になっている。小学生では男女の差が明確ではないが中学生になると男子で欠席傾向を示していることが明らかになる。欠席理由(表2-2-8)は、女子は体の具合が悪いが多い。男子は中高校生で「けが」「気分が悪くなる」高校生では、「何となく行きたくない」が多いことがわかる。男子の怠学傾向がうかがえるところである。

次に、生活実感について、「恵まれた家と思うか」(表2-2-9)では、男子の方が肯定、否定ともに両方が高い比率を示すが、女子は「わからない」や「どちらともいえない」という不明確な比率が高い。また、「生活の満足度」(表2-2-10)では、小中学生の男子は満足度が高いが高校生は

女子の方が高い。「満足していない」者は小学生では男子、中学生では女子、高校生では男子の比率が高く、学年によって相違することが示されている。満足度については男女の一定の傾向はそれほど明確とはいえないようである。

悩みごと(表2-2-11)は、小中学生では友達、家庭、学校のことについて女子の悩みが高く、男子の高率なのは病気のことについてのみである。高校生についても、女子の悩みは多くの項目で高い比率を示すが、とくに、自分のことや家庭のことが男子よりも高い。男子については、勉強、進路、異性の悩みが女子よりも高い比率である。

高校生についての悩みみの程度、相談する人を質問した結果、悩みの程度は、食欲や睡眠のよう

表2-2-8 欠席の理由

	小 学 生			中 学 生			高 校 生		
	男 子	女 子	合 計	男 子	女 子	合 計	男 子	女 子	合 計
体の具合が悪い	147 81.7	137 84.0	284 82.8	81 71.1	64 76.2	145 73.2	67 56.8	51 68.0	118 61.1
け が	11 6.1	15 9.2	26 7.6	14 12.3	3 3.6	17 8.6	12 10.2	7 9.3	19 9.8
気分が悪くなる	2 1.1	0 0.0	2 0.6	3 2.6	0 0.0	3 1.5	3 2.5	0 0.0	3 1.6
何となく行きたくない	2 1.1	2 1.2	4 1.2	3 2.6	5 6.0	8 4.0	12 10.2	5 6.7	17 8.8
おもしろくない			0	4 3.5	3 3.6	7 3.5	5 4.2	2 2.7	7 3.6
そ の 他	18 10.0	9 5.5	27 7.9	9 7.9	9 10.7	18 9.1	19 16.1	10 13.3	29 15.0
合 計	180 52.5	163 47.5	343 100.0	114 57.6	84 42.4	198 100.0	118 61.1	75 38.9	193 100.0

表2-2-9 恵まれた家と思うか

	小 学 生			中 学 生			高 校 生		
	男 子	女 子	合 計	男 子	女 子	合 計	男 子	女 子	合 計
は い	330 40.4	294 39.4	624 39.9	245 37.5	227 34.7	472 36.1	331 32.4	253 29.6	584 31.1
い い え	38 4.7	16 2.1	54 3.5	44 6.7	36 55.5	80 6.1	302 29.5	212 24.8	514 27.4
どちらともいえない	206 25.2	201 26.9	407 26.0	222 33.9	234 35.7	456 34.8	329 32.2	339 39.6	668 35.6
わ か ら な い	242 29.7	236 31.6	478 30.6	143 21.9	158 24.1	301 23.0	60 5.9	52 6.1	112 6.0
合 計	816 52.2	747 47.8	1,563 100.0	654 50.0	655 50.0	1,309 100.0	1,022 54.4	856 45.6	1,878 100.0

表2-2-10 現在の生活の満足度

	小 学 生			中 学 生			高 校 生		
	男 子	女 子	合 計	男 子	女 子	合 計	男 子	女 子	合 計
満足している	477 58.8	429 57.6	906 58.2	285 43.1	237 36.3	522 39.7	356 34.8	325 38.3	681 36.4
満足していない	83 10.2	65 8.7	148 9.5	93 14.1	120 18.4	213 16.2	99 9.7	72 8.5	171 9.1
どちらとも言えない	150 18.5	146 19.6	296 19.0	197 29.8	202 30.9	399 30.4	447 43.7	359 42.3	806 43.0
わ か ら な い	101 12.5	105 14.1	206 13.2	86 13.0	94 14.4	180 13.7	122 11.9	93 11.0	215 11.5
合 計	811 52.1	745 47.9	1,556 100.0	661 50.3	653 49.7	1,314 100.0	1,024 54.7	849 45.3	1,873 100.0

表 2-2-11 悩みごとはあるか

	小 中 学 生				高 校 生			
	男 子		女 子		男 子		女 子	
友 達	143	26.7%	350	47.2%	102	14.8%	118	18.3%
異 性	—	—	—	—	242	35.1%	190	29.4%
家 庭	95	17.7%	147	19.9%	97	14.1%	127	19.7%
学 校	91	17.0%	152	20.5%	42	6.1%	27	4.2%
病 気	50	9.3%	42	5.7%	104	15.1%	73	11.3%
勉 強	316	59.0%	444	60.0%	341	49.4%	295	45.6%
進 路	—	—	—	—	437	63.4%	403	62.3%
自 分	—	—	—	—	258	37.4%	278	43.0%
そ の 他	105	19.6%	136	18.4%	55	8.0%	28	4.3%

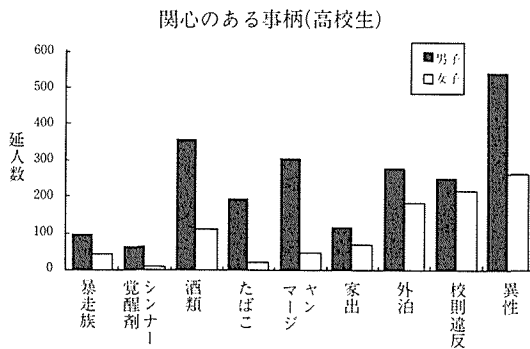


図 2-2-9

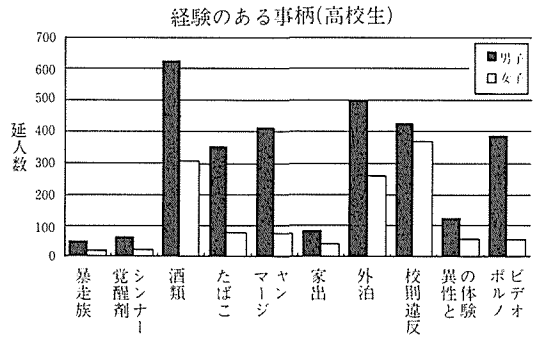


図 2-2-10

な日常の基本的な生活の領域ではそれほど変化を受けないが、自分が嫌いになったり、無気力になったり、人を恨んだりすることは「大いにある」としている。中退や家出、死にたいと思うほどのことはないが、勉強が手につかないということはかなりあるようである。相談する人は、学校のことが、母61.4%と高く、進路についても母が33.5%である。友達、異性、家庭、病気、自分自身のことについては友達との相談が多い。

次に、高校生についてのみ関心のあることと経験のあることを質問した(図 2-2-9、10)。これは実数を示す図であるが、男子の関心は女子よりもいずれの項目においても高い。上記の異性の悩みの多さとも関連していると思われる。さらに、経験についても同様、男子の方が高い数字を示している。異性についての関心は高いが経験は少なく、酒類や外泊、校則違反が多い。また、男子のボルノビデオを見た経験はマージャン、タバ

コなどと同様女子との差が大きい項目となっている。比率でみると関心のある順序は、異性58.9%、酒34.3%、校則・規律違反34.0%、外泊33.7%、マージャン25.7%、タバコ15.7%である。経験の比率が高い順序は、酒66.3%、校則・規律違反56.7%、外泊53.8%、マージャン34.6%、タバコ30.8%、ボルノビデオ31.6%、異性との体験12.9%、家出・放浪9.2%、シンナー・覚醒剤6.2%、暴走族5.0%である。(1990年1月10日受理)